

1 調査の概要

- ・ 調査場所：飯田市上久堅^{かみひさかた}8, 107 番地ほか
 - ・ 調査原因：国土交通省飯田国道事務所による国道 474 号飯喬道路^{いいたか}建設工事
 - ・ 調査期間：平成 24 年 8 月 17 日～12 月 14 日 (予定)
 - ・ 調査面積：16,742 m²
 - ・ 検出遺構 (遺構の時期は出土遺物から判断)
- (1) 中世後半 (15～16 世紀)：曲輪^{くるわ}、礎石建物跡^{そせきたてもものあと}、石列^{いしれつ}、溝跡^{みぞあと}、墓坑^{ぼこう}ほか。
- (2) 近世後半 (18～19 世紀)：掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてもものあと}、竪穴建物跡^{たてあなたてもものあと}、土坑^{どこう}、石列^{いしれつ}、柵列跡^{さくれつ}、溝跡ほか

2 神之峯城の歴史

神之峯城は、室町～戦国時代に、城周辺の天竜川以東を治めた在^{ざいちこくじん}地^ち国^く人^{しん}の知久氏の本城で、山頂に本丸跡と二の丸跡があります。今回の発掘調査は、玉川に面した神之峯の北西側の中腹で行いました。

地元研究者によると、16 世紀初頭頃には知久氏が神之峯城に入城しており、天文 23 年 (1554 年) の武田信玄による攻撃で落城、その後、天正 10 年 (1582 年) に再興されますが、2 年後の天正 12 年 (1584 年) に廃城となったとのこと。



写真 1 神之峯城跡 調査区全景 (北西から神之峯城跡を臨む。写真手前に玉川が流れている)

3 発掘調査でわかったこと

調査区内の土地利用とその変遷

今年の調査区内は、神之峯の山頂から山腹にのびる尾根と谷が複雑に入り組む地形です。調査前の踏査では、調査区内に平坦地が数多く確認されました。三日月形で小規模なもの（平坦地 1・3・5・10～16・18・23～26）と、方形で大規模なもの（平坦地 2・4・6・7～9・21・22）とがありました。

①神之峯城跡 1 期（中世後半、15～16 世紀）－神之峯城存続時期－

3 条の尾根に小規模な曲輪（^{ぼうぎよ}防御施設）を構築しています（写真 2）。曲輪には城兵が駐屯（待機）し、山腹から本丸に向けて攻め登る敵兵を攻撃したものと推測されます。一方、谷を埋めて造成した平坦地 7 には、礎石建物が作られました。この礎石建物跡は 2 間×3 間（調査区内での確認規模。建物は南側調査区外に延びる）で、その西側に、建物の境界を示す溝が掘られています。この礎石建物跡は、知久氏が神之峯城在城時に建立したと言われている寺院「知久十八ヶ寺」のひとつ「^{ほうしんいん}法心院」の推定地と近い場所から発見されたことから、「法心院」であったと推定されます。なお、礎石建物跡の背後の尾根では墓坑が見つかっていますので、城郭という軍事（防御）施設の一面に寺院＋墓地が形成されています。



写真 2 尾根につくられた小規模な曲輪

②神之峯城跡 2 期（近世後半、18～19 世紀）－神之峯城廃城後－

尾根の平坦地 6 では、斜面（自然地形）を削ることで平坦面を形成し、そこに掘立柱建物跡・土坑からなる屋敷地をつくっています（写真 3）。平坦地 6 の南東側に接する平坦地 7 を埋め立てて、これまでより広い平坦地を造成しました。直径 50～80cm の石を並べて屋敷の区画がつけられました。また、この時期の掘立柱建物跡の柱穴は、山の基盤層（花崗岩）を深く掘り込んでいました。



写真 3 平坦地 6

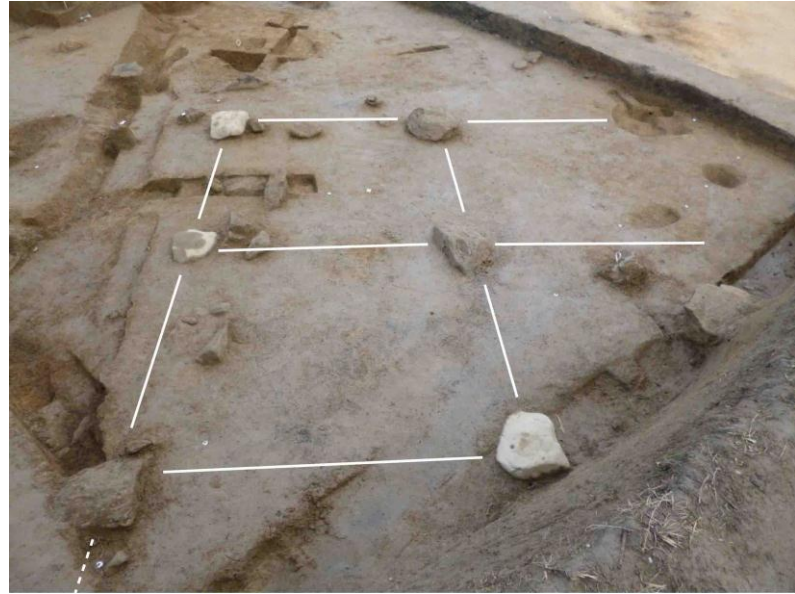
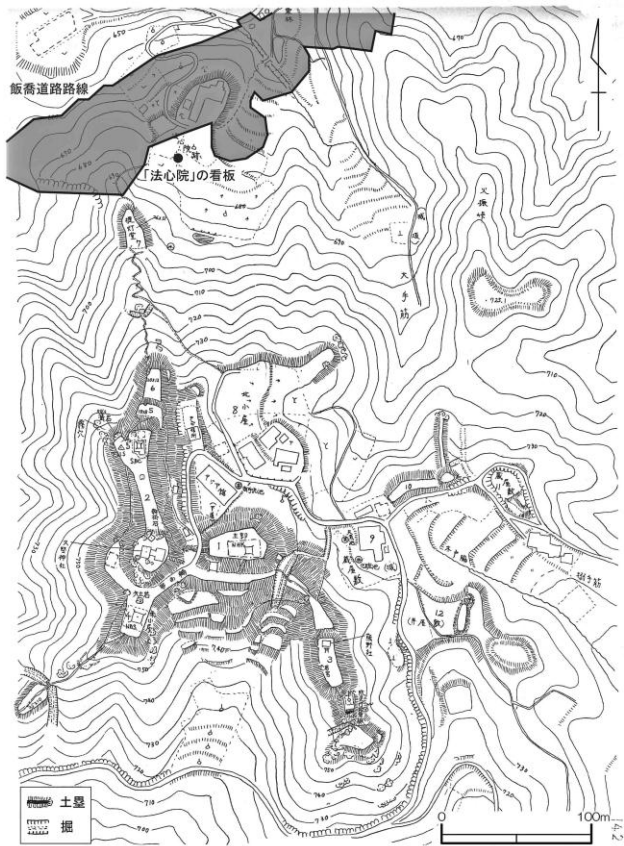
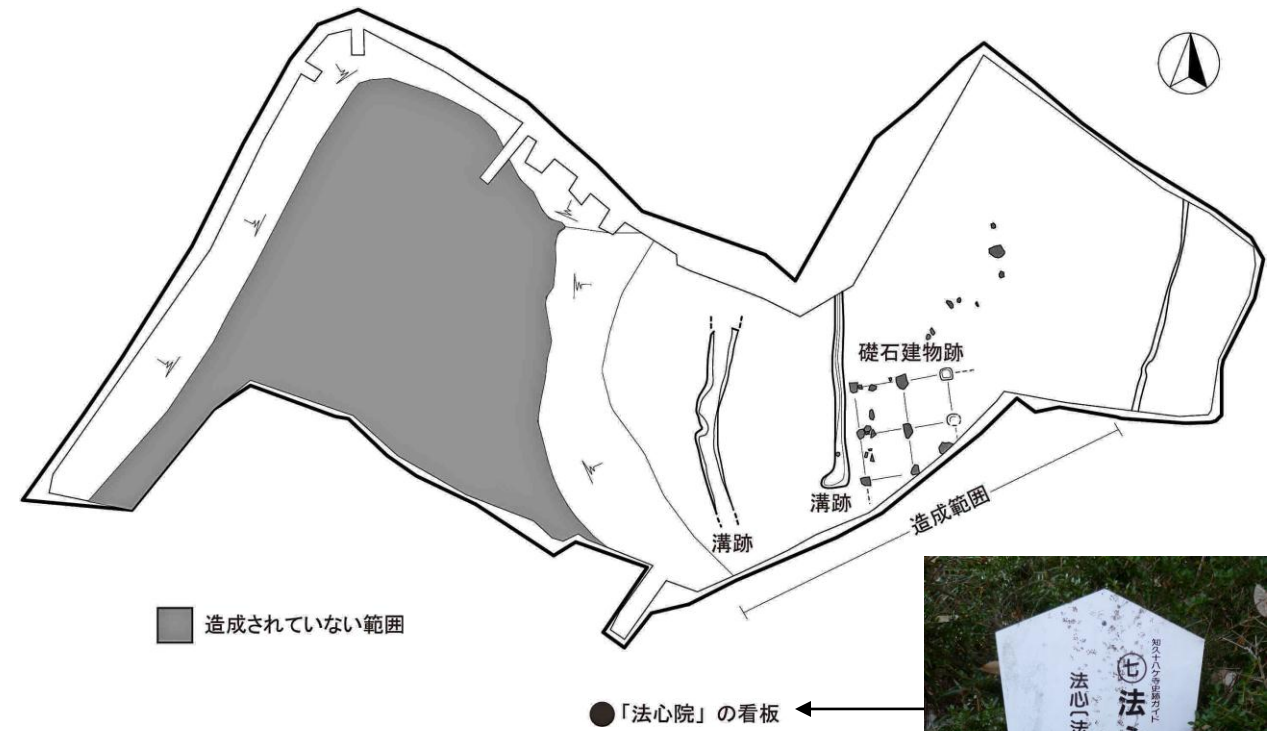


写真4 中世 礎石建物跡 (南から臨む)

神之峯城跡 1期 (中世後半 15~16世紀)



■ 造成されていない範囲

● 「法心院」の看板



図3 平坦地6・7 中世遺構 全体図

図1 神之峯城跡 縄張図 (宮坂武男 1999『図解 山城探訪—下伊那資料編—』第7集に加筆)

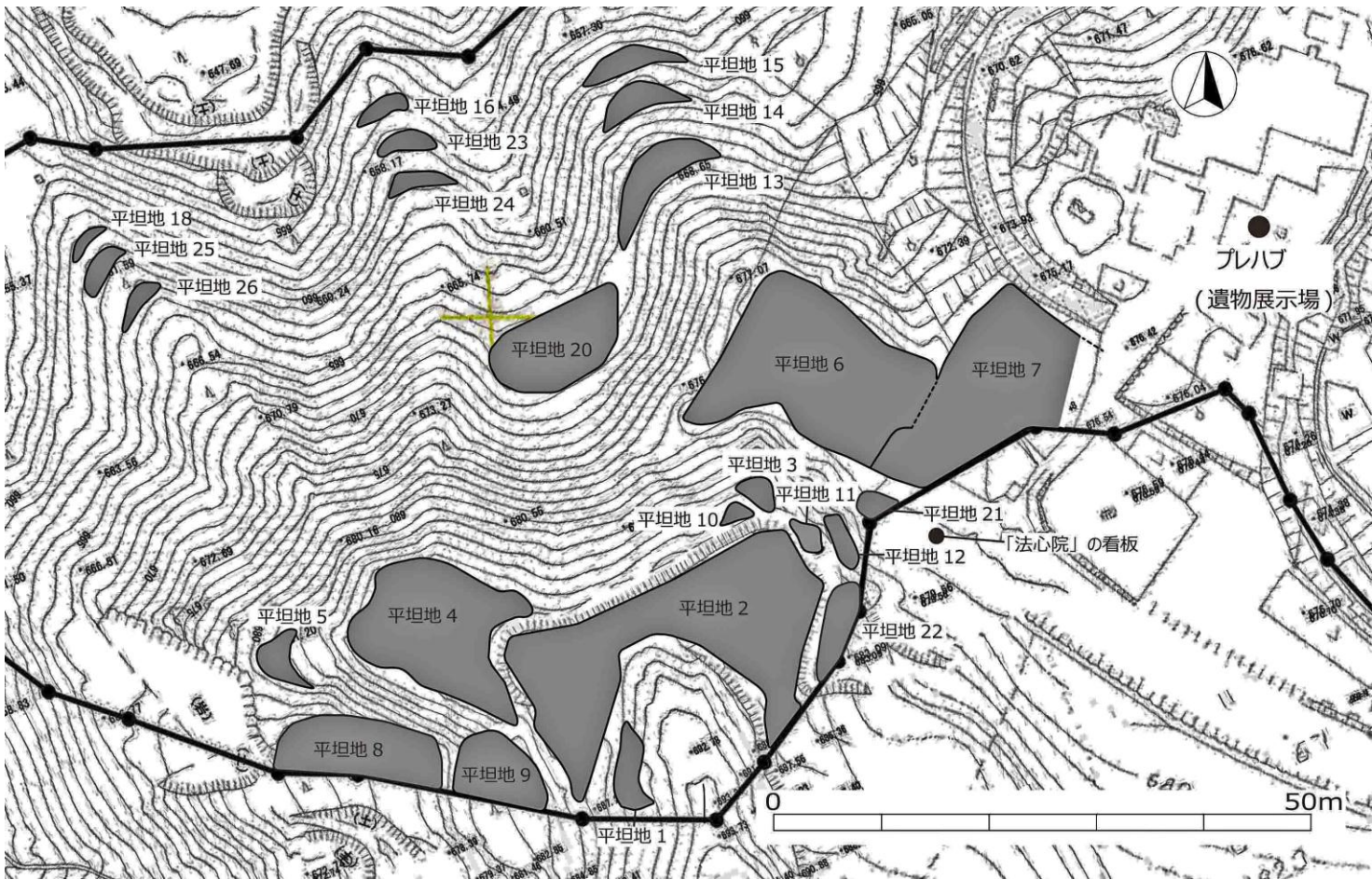
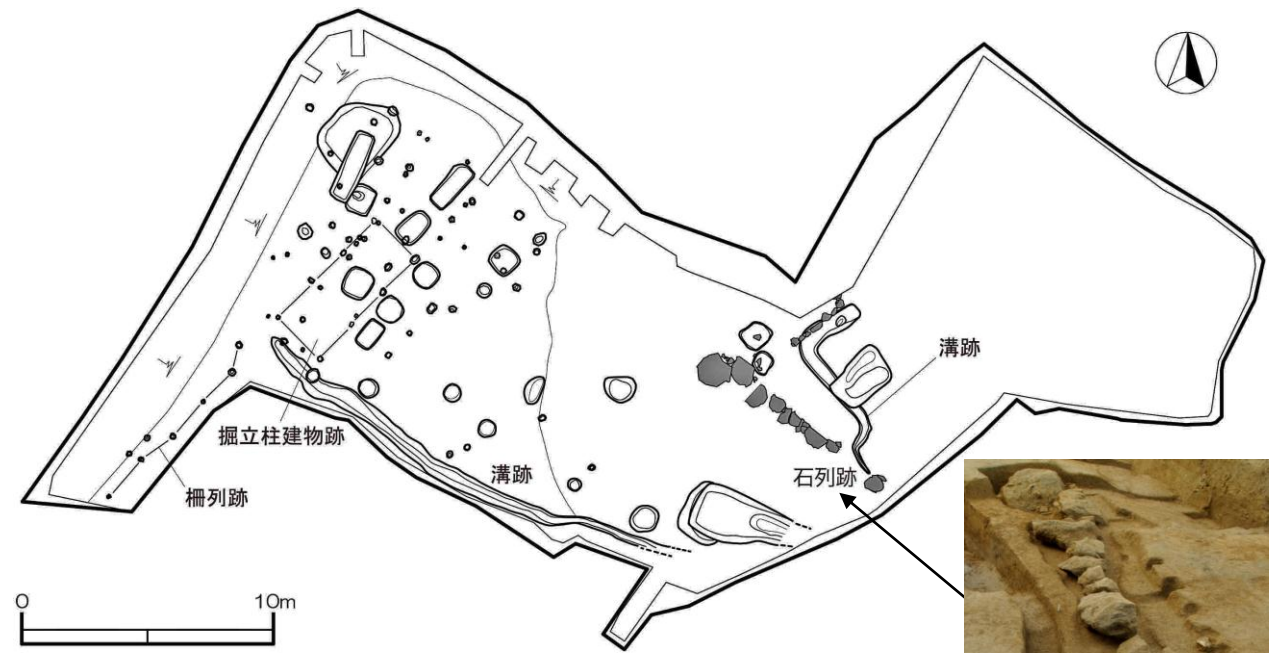


図2 神之峯城跡 平坦地 配置図

神之峯城跡 2期 (近世後半 18~19世紀)



0 10m



図4 平坦地6・7 近世遺構 全体図

写真6 近世 石列

写真5